

パースの「心の哲学」の再構築：美学へのパース記号論の応用

加藤隆文

要約

本論文の最終的な目標は、十九世紀後半にアメリカで生まれたプラグマティズムという哲学上の立場から美学（芸術や感性的なものについての理論的研究）を構想することにある。しかし本稿筆者は、プラグマティズムと美学の関係について、現況に必ずしも満足していない。本論文では、C・S・パース（Charles S. Peirce, 1839-1914）のプラグマティズム、とりわけ心をめぐる彼の諸議論に注目することで、芸術を含む様々な文化現象、ひいては美学という学問体系一般の形成・発展について考察する際にパース記号論が有効であることを示す。

【第1章】

第1章では、プラグマティズムと美学が交差している具体的事例と思われる先行の諸議論を検討する。

1.1 節では、これまでにプラグマティストの陣営から提出された芸術論を批判的に検討する。現代に至るまで最も影響力を発揮したプラグマティストの芸術論は、J・デューイ（John Dewey, 1859-1952）が一九三四年の著書『経験としての芸術』において提唱した〈鑑賞者や作者が芸術的対象と相互作用することで得る経験こそが芸術なのだ〉という芸術論である。近年では、アメリカの美学者 R・シュスターマン（Richard Shusterman, 1949-）がこの理論を踏襲して提唱

した「プラグマティスト美学」が注目された。しかし、デューイやシュスターマンの芸術理論は、「芸術」と呼ばれるものの範囲を広げるための手段、芸術を民主化するための手段としては有効かもしれないが、それ以上の積極的な批評言説を現出することは困難である。そこで本稿は、デューイではなくパースのプラグマティズムに着目する。

1.2節では、パースの思想と美学の交差点を示唆する先行の試みとして、芸術批評家 R・クラウス (Rosalind Krauss, 1941-) が、パース記号論のインデックス概念を芸術作品の批評に応用して展開する、いわゆる「指標論」に注目する。この理論は、C・グリーンバーグ (Clement Greenberg, 1909-1994) らの推進した形式主義的な芸術批評と距離を取り、芸術作品が物理的な過程を現前させていることに注意を向ける点で重要である。しかし、こうした「物理的現前の痕跡」としての芸術観がいかなる態度へ結びつくのかは示されておらず、脱形式主義以上の意義は詳らかではない。この現状を踏まえると、インデックス概念について、クラウスとも独立に、パース思想の特性を踏まえた意義を再検討しなければならない。他方、パース自身の提唱する学問体系の中にも「美学 (esthetics)」と呼ばれる領域は存在する。この「美学」は「規範学 (normative sciences)」というパース独自の学問の一種として構想されているため、パースの思想体系を踏まえた上で、現代の美学と独立に検討する必要がある。とはいえ、パースの思想体系において規範学とインデックスは共通した重要な意義を有しており、規範学を踏まえた上でインデックス概念を再解釈し、これをパースのプラグマティズムに基づく美学への構想に役立てるということが可能であると本稿は提案する。

続いて 1.3 節では、人類学者 A・ジェル (Alfred Gell, 1945-1997) がパースのインデックス概念を独自に活用して提唱する「芸術の人類学」という理論に注目する。ジェルの「芸術の人類学」においてインデックスは、社会的な慣習に由来する推論過程を経て他者の意図を媒介する人工物を指す。この理論は、ある意図によって一連の行為作用(action)を開始させる性質、すなわち「行為作用性(agency)」が、無数の人や物によって媒介される無限の連鎖過程を描き出す。さらにジェルは、例えばマオリ族の集会所は、代々この集会所を造り育ててきた共同体の祖先たちの集合的な行為作用性を媒介しているインデックスであると見なす。こうした態度は必ずしもパースに忠実ではないが、人間の行為作用性のありかを多層的に捉える視点を提供している。さらに本稿は、パースの記号論的宇宙観の中で「芸術の人類学」を読み替えれば、この理論は人間以外の生命体をも含めた広い生態系の行為作用性の体系を思い描く研究へも開かれうると論じる。

【第 2 章】

第 1 章の議論は、心を生態系の中で発展した記号過程として捉えるパース記号論のうちに、パースのプラグマティズムに基づく美学を提案するための足がかりがあるという見通しを与えてくれる。特に、ジェルの「芸術の人類学」が心の哲学における「拡張した心」に似た主張を展開している点が興味深い。これらの関心を踏まえ、本論文の第 2 章は、心をめぐるパースの思想を現代の心の哲学の文脈の中で語り直す研究、いわばパースの「心の哲学」を再構築する研究を行う。本稿では主として、(1)「拡張した心」とパース思想

の比較研究、(2) パース思想に基づく命題的態度の理論の構築の二つを遂行する。

2.1 節では、(1) 「拡張した心」とパース思想の比較研究を行う。パース研究者 C・F・ディレイニー (Cornelius F. Delaney, 1938-) は、パースの内観能力の否定ならびに〈心的作用は全て記号の推論行為である〉という主張を受け、パースの心の理論を一種の外在主義として説明している。本稿は、この議論を踏まえた上で、さらに、A・クラーク (Andy Clark, 1957-) らが「拡張した心」理論を通して主張する能動的外在主義の一種としてパースの心の理論を捉えることもできると(ひとまずは)主張する。ただし、「拡張した心」は、従来は頭蓋内・皮膚内に内在すると考えられてきた「心」が生命体の外的環境に広がっているという主張である。しかし、この理論の実質は心的システムの捉え方の更新の提案に過ぎず、これは従来から存在した「心」が「拡張している」という主張にはなりえないという問題を残すように思われる。そこで本稿は、続いて、パースの心の理論の持つ独特の自己概念に注目する。パースの思想において、自己とは心の一種であり、つまりは記号過程である。そして、自己意識は、自身の無知や誤りに気づくことから推論され、獲得される。さらに、自己は外的世界と内的世界を行き来することで自己制御を確立し、進化を続けてゆく。こうした発想を踏まえれば、パースの心の理論は、能動的外在主義というよりはむしろ、連続主義に基づく特殊な自己概念を含んだ記号一元論として立ち現れる。パースの連続主義に基づく自己概念は、「拡張した心」理論に対する有効な修正案を提供する。パース記号論によって修正された「拡張した心」理論は、心的過程の内在性と外在性を問い直し、むしろ多層的な連

続体としての認知システム像を提案する主張として、受け入れ可能になる。

次に 2.2 節で、(2) パース思想に基づく命題的態度の理論の構築を遂行する。W・V・O・クワイン (Willard van Orman Quine, 1908-2000) は、パース思想の命題中心的な側面を指摘しつつ、プラグマティズムの格率を行動主義的な思想として理解している。しかし、信念などの命題的態度は、単純な行動傾向として理解するだけでは不十分である。プラグマティズムの格率に則して言えば、例えば「ダイヤモンドは硬い」という信念は、「ダイヤモンドは他の色々な物質を擦り付けても傷がつかないだろう」と考える行動傾向等へと結びつかなければならない。そのためには、この信念と思考との間の結びつきがいかにして確立するのかを説明する理論が必要である。そこで本稿は、パースの命題的態度の理論を、むしろ機能主義的な枠組みのもとで構想する。こうした方向性は、J・フォーダー (Jerry Fodor, 1935-2017) が命題的態度を巡って提出した内的表象システムの理論と一致する。

ただし、命題的態度の理論にどのような意味論を用意するのかという点で、本稿はフォーダーと意見を異にする。フォーダーは機能的役割意味論につきまとう困難を指摘し、自身では情報意味論と概念原子論を選択する。一方、本稿の提案するパースの命題的態度の理論は、「パース的習慣に基づく意味論」(「PH 意味論」) を提案する。プラグマティズムの格率に則れば命題的態度は因果的ネットワーク内における機能的役割 (いかなる行動傾向へ推移するか) によって個別化されると考えられるが、この因果的ネットワークがなぜ各命題同士の推論的役割のネットワークと高度に一致するのかを説

明する理論が必要である。PH 意味論は、アブダクション、帰納、演繹という三つの推論過程を経て成立する習慣という概念によって、これら両ネットワークの関連性を説明しようとする意味論である。これに関連する論点として、フォーダーによる概念プラグマティズム批判に対して、パースのプラグマティズムの立場から応答をする必要があるだろう。この点については 2.3 節で考察する。

2.3 節では、パースのプラグマティズムの定式化の変遷を確認した上で、パースのプラグマティズムが現代の心の哲学の論者の関心とどう重なるのかを総合的に検討する。パースのプラグマティズムは、記号の意味を、「C ならば X せよ」ないし「C ならば X するだろう」の形で表される [C, X] の習慣的傾向性に帰着させる理論であると理解できる。2.2 節で提出するパース思想に基づく命題的態度の理論の背景にはこのプラグマティズムがある。本稿ではこの理論を、L・R・ベイカー (Lynne R. Baker, 1944-2017) による命題的態度の説明を参照することで、より精緻化する。また、パースは「スコラ的実在論 (scholastic realism)」という説を主張し、自然界で実際に作用している一般的法則は実在のものに見なしている。この実在論において「実在」と捉えられているのは物理的対象ではなく記号過程である。こうした実在論は奇異に映るかもしれないが、ベイカーが提案している実践的実在論 (Practical Realism) は命題的態度が必ずしも脳の物理的状态に還元されないことを主張している。これらのことから、ベイカーの理論は、パースの命題的態度の理論の発展性を現代の文脈において評価する上で有効な参照点となりうるだろう。

他方、心の哲学の文脈に置かれたとき、プラグマティストは、フォーダーによる概念プラグマティズム批判に応答する必要に迫られる。本稿では、R・カルナップ（Rudolf Carnap, 1891-1970）の意味公準という考えを活用して概念プラグマティズムを擁護するB・リーヴス（Bradley Rives）の論考に注目する。フォーダーの批判によると、概念の分析的定義を放棄する概念プラグマティズムは思考の合成性を説明できなくなってしまう。一方、リーヴスは概念の理論について、〈概念の内的構造を認めるかどうか（原子論を採るか否か）〉〈推論的役割意味論を採るか情報意味論を採るか〉という二つの問いを軸にして、四通りの理論がありうるとまとめている。フォーダーの立場は〈原子論＋情報意味論〉であるが、リーヴスは自身が有望視する「意味公準プラグマティズム」を〈原子論＋推論的役割意味論〉の一種と位置付ける。本稿は、カルナップの思想が言語の記述ではなく将来の言語活動のための規範を提案する側面を持つということ踏まえ、リーヴスとは異なる形で「意味公準プラグマティズム」を主張する。すなわち、設定された規範の上では意味論的規則を参照した分析性を認められると考え、このことによってフォーダーの批判を回避する。

【第3章】

第3章では、第2章で導き出したパースの「心の哲学」の発想を美学の問題と接続する。

まず3.1節で、いわゆる分析美学を主軸に展開してきた二十世紀の英語圏美学を概観した上で、R・シュスターマンが一九八〇年代に行った分析美学批判を検討する。本稿はシュスターマンの批判に

は同意するが、現代の英語圏美学において目立つようになってきた経験的美学は、シュスターマンの批判への応答になっていると考え、これに注目する。そして、経験的美学の成果を適切に評価し、美学という体系全体のうちに取り込むためには、プラグマティズムの態度が不可欠であることを論じる。

3.2 節と 3.3 節では、それぞれにパース思想に注目する人類学者の論考に注目する。3.2 節では、一九八八年にニューヨークで開催された展覧会「ART/artifact」をめぐる考察を経て人類学者 A・ジェルが提出している、「罨としての芸術」という考えに着目する。ジェルは、パース思想の諸概念を活用して「芸術の人類学」という理論を提唱しており（1.3 節）、「罨としての芸術」は、この理論の延長線上にある芸術観といえる。展覧会「ART/artifact」では、狩猟用の罨が芸術作品のように（つまりインスタレーション作品のように）展示された。ここには芸術の定義を問い直す意図が見て取れ、ジェルもそうした問題意識を共有している。しかし、本稿はむしろ、ジェルの論考を、アート・ワールドに触れた一人類学者の態度表明として受け取る。こうして、本稿がジェルの論考から引き出す芸術論は次のようにまとめられる。すなわち、動物を捕獲するための罨は、罨の制作者である狩人と罨の犠牲者である動物が共に属している生態系を表象している。そして、芸術作品も同様に、制作者が鑑賞者を捕える罨であり、制作者と鑑賞者を取り巻く生態系の表象となっていると考えられる。続いて 3.3 節では、人類学者 E・コーン（Eduardo Kohn, 1968-）の研究に注目する。コーンは、パースの記号論から着想を得て、エクアドルのルナ族が森林の中で構築している多層的な自我の生態系を説明している。多層的というのは、ル

ナ族は「私」「私たち」という一人称の自意識を動物や周囲の環境へ適用する場合があるため、森林が様々な位相の自我の集合的な生態系として捉えられることを指している。

3.4 節では、パース記号論（あるいはパースの「心の哲学」）を美学に応用することで、「パースのプラグマティズムに基づく美学」を提案し、その意義を問う。ジェルとコーンはそれぞれに、巨大な記号過程である生態系内で進化してきた個々の記号過程から人間の種々の活動が導かれるという発想を有している。コーンの思想は芸術と直接的に関わるものではないが、3.2 節で論じている通り、本稿は、ジェルの「畏としての芸術」概念から、芸術を生態系の表象と捉える芸術論を見いだす。そして、この芸術論を採用する場合に、コーンの研究は、記号の生態系についてのパース思想の洞察を明らかにする補助線として有為な参照点となる。本稿の芸術観からすれば、特定の歴史を背負ったアート・ワールドもまた、一つの生態系と言えるかもしれない。しかし、これは限定された領域の生態系に過ぎない。本稿ではプラグマティズムの美学を、記号の生態系の生成変化を理解し、未来の生態系を構想する思想として提示したい。さらに本稿は、美学それ自体を一つの巨大な記号過程と捉えることを提案する。プラグマティズムの美学は、美学という体系内で記号過程が発展してゆく際に参照すべき規範を提案するという側面を持つ。この点では、本稿はパース思想における「規範学」としての美学という発想を受け継ぐものである。